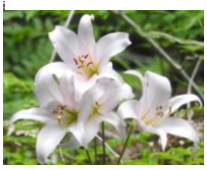
四谷の千枚田だより

第226号



ササユリ

稲作一口メモ

五月初めに購入した苗は、植えて活着前にとろけてなくなってしまうか？と心配したが、二葉、三葉が順調に発達、まずは、やれやれ…

田植機で植えた苗が根本から切れて浮き苗が目立った。田植機が古いからかと思ったら、他でも同様な話を聞いたので、中古の田植機を買わなくても済んだ。やれやれ…

青虫の被害は若干あったものの、蔓延は逃れた。やれやれ…

中干しは、稲の倒伏や、分げつ(株数)の過剰による過繁茂(葉の受光態勢を悪くし、下葉枯や耐倒伏性を弱める)を抑えたり、下位節間の伸長を抑える効果がある。…今年の稲は、長くてしょんない…。などと聞くが、原因は中干しの有無にある。

田植えから水を張った状態で、土中の酸素が少なくなっており、中干しをすることで硫化水素の硫化物質の発生を抑え、根の生育を健全に保つ効果があるし、千枚田では収穫時の地体力が増すため、バインダーでの刈り取り作業が楽にもなる。

中干しの時期は植えてから三十日過ぎとされており、期間は概ね二週間と言われているが、千枚田ではサワガニが田んぼに穴を空けたりするので、あまり、干しすぎると、後で水が浸かないなど、思うようにはいかない。

稲の生育を観察し「穂ばらみ(幼穂形成期)」を確認したら深水にする。幼穂形成期のこの時期は、稲の生育期間中で最も水が必要な時で、この時期に水切れになると穂がでにくくなったり、出穂が止まったりする。昔から、この時期の水のことを「花水」(穂の花が咲く時期に必要な水)と言い、やや深水にして環境変化を与えないように留意する。

出穂から十日くらい過ぎると登熟期に入り、間断灌漑を行い、暑さと稲の老巧化などから発生する根腐れを避けよう。

絵画コンクール作品募集

２０２２「四谷の千枚田」絵画コンクール(主催 鞍掛山麓千枚田保存会・東三河郵便局 後援 新城市、新城市教育委員会、新城市観光協会、奥三河観光協議会、東愛知新聞社)で実施します。応募対象は小学生・中学生。入賞者には本年度新米・図書券・五平餅セット他多数。

問い合わせはNPO法人国内産米の粉伝統食文化推進ネットワーク

☎ 0532-29-0808

http//kokukome.com/

東三河管内郵便局店頭、千枚田案内看板ポケット、新城市鳳来寺山自然科学博物館、奥三河観光協議会、八雲だんご直売店ほかにチラシ・応募ハガキがあります。

開催にあたって

止まる気配のない新型コロナ感染症の影響で世の中のすべてが自粛、自粛と委縮ムードの昨今、こんな時だからこそ、かえって明るい話題として小・中学生を対象に四谷の千枚田をテーマに自由に描いていただければと企画しました。

なお、この企画には千枚田の余剰米(古米)を使用した千枚田五平餅を郵便局の宅配便や道の駅など、全国展開でお馴染みの「八雲だんご」鈴木社長さんの四谷の千枚田保存継承への大きな思い入れから毎年、実施されております。

愛知県百五十年の歩み

廃藩置県の後、明治五年に誕生した愛知県。誕生から歴史上に残る出来事を貴重な写真とともに紹介されている。

二十八のキーワードで知る愛知の多彩な魅力のうち、産業「農」の項で守りたい原風景、四谷の千枚田標高八八三㍍の鞍掛山に水源を持ち、ふもとに広がる四谷の千枚田。約四百年前に開墾され、今も四百二十枚の田を耕し、地域に伝わる宝物を大切に守り続けている。標高二百二十～四百二十㍍にかけて連なる、石積みの美しい棚田は、「日本の棚田百選」に選定されている。と紹介。また、キラッと奥三河観光ナビ「四谷の千枚田」で LINK されている。

愛知県広報誌

あいちのトビラ 2022(英語版・中国語版・日本語版)に「自然と暮らしの調和」と題して四谷の千枚田の全景が掲載。また、動画でも配信されている。

異例の早い梅雨明けと記録的な暑さ

今日は七月十日、例年だと、うっとうしい梅雨の最中であるが、今年は六月十四日に梅雨入り、六月二十七日には梅雨が明けてしまった。たった十四日間の梅雨で、異例の早い梅雨明けであった。

因みに例年の梅雨入りは六月六日、梅雨明けは七月十九日で四十三日間にも及ぶ梅雨と比べるとあまりにも短い梅雨であった。

六月二十五日から九州から東北で三十五℃超の記録的な猛暑日が連日続いた。六月に四日連続の猛暑日は観測史上最長記録である。

兎に角、暑かった。六月でこの暑さだと、本番の夏が思いやられる。

念仏踊り

身平橋組・西組共進連で継承される念仏踊りは終息の見えないコロナウイルス感染予防対策ガイドラインを忠実に守り、八月十四日、一晩に身平橋海源寺の本尊様に念仏を捧げ、その足で初盆の小山傅治郎様宅に赴き、念仏のみを捧げ、座敷に上がっての接待などもなく、夜道を帰路につく。「はね込み」も、やむなく中止となった。まことに 残念無念である。

地域の花「鳳来寺百合」

今年は、今のところイノシシの出没もなく、道端や土手に、今、咲かんとばかりの鳳来寺百合がみられる。本種の和名は山百合(ヤマユリ)であるが地方によって「吉野百合」、「叡山百合」、「鳳来寺百合」などと、各産地に因んだ名称で親しまれている。時々、鳳来ユリなどと言われているが地域の花として鳳来寺百合(ホウライジユリ)と呼ぼう。

今年こそは花が見られると期待していた矢先の七月五日、サルの軍団が襲来、県道沿いの土手に二十本近くあった鳳来寺百合を引抜き、蕾を食べてしまった。軍団は民家に続く畑のスイカやジャガイモ、挙句の果て、柿の枝まで折る始末。サルの軍団の侵攻の後は精魂かけて育てた野菜は壊滅。我々人間への兵糧ぜめでも企てたのか?、爆竹やロケット花火で応戦しても、勝ち目はない。

ツチアケビ

今年はいつになく「ツチアケビ」が多く見られる。姿は赤いアケビのようであり、初めて見る人には不気味にみえる。

葉がなく、葉緑素を持てないので、光合成をして自分から養分をとることができない菌従属栄養植物(菌類からすべての養分を得て生活する腐生植物)である。抜いてきて植えても、種を蒔いても育てることは出来ない植物であるから、そっと見るだけにしてもらうと、有難い。

写真 上 ツチアケビの花 下 アケビのような赤い肉質の実

発行 令和四年七月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責 小山舜二